

連載

変わる日本のまちづくり

第34回

農福連携の哲学を実践する 北海道北広島市の竹内農園

北星学園大学名誉教授

杉岡 直人

星槎道都大学准教授

畠山 明子



はじめに

現在、わが国は働き方改革の時代といわれ、DXやリモートワークの必要性が強調されている。よく考えると、家族が安心して暮らし、働く我々が自分にあった生き方を選択することができる社会をイメージできることが本質ではないか。人は誰でも仕事の選択をする上で、自分が納得する働き方を探すことになる。最初は、給与や仕事の内容、職場の環境について考え、就職先を決める。けれども、仕事に就いてみると疑問が湧いてくる。それは、自分がやりがいのある仕事を続けていくことになっているかど

うかということである。

今回、紹介する竹内農園は、地域共生社会の推進役としての役割を果たしている事業所である。地域に住む障がい者一人ひとりの個性を尊重する農作業の環境づくりを重視し、多様な野菜栽培に取り組み農家として事業を展開している。農園の代表である竹内巧さんは、オートバイ製造、自動車部品、船舶や農業機械で必要とされる発動機・船外機の事業で日本を代表するヤマハ発動機株式会社に入社し、インドでの海外勤務を経験したビジネスマンであった。企業を退職した彼は、なぜ障がい者と共に農業を手がけることを選択したのか。

1 新規就農に向けた周到な準備

竹内さんは、小樽商科大学卒業後、ヤマハ発動機株式会社に入社して、本社で経理業務に携わった後、インドの子会社に勤務した。そこで事業を進める上で、地元人材を育てることの大切さに気づき、自分の出身地である北海道を元気にするために、第一次産業の農業が活性化するような事業を手がけたいと考えようになった。北海道は、過疎化と高齢化が進んでいる。若者は首都圏に就職する流れが強く、地元に残っているのは高齢者や障がい者が多くなる。竹内さんはそんな地域で働く機会を提供できる職場を作りたいと決意し、会社を退職した。2007年に退職後、希望していた就農機会を求めて相談して回ったが、現在のように歓迎される声もかからず、途方に暮れる状態であった。しかし、粘り強く模索するなかで、たまたま知人の紹介で2008年に社会福祉法人札幌この実会に就職した。この実会といえば、障がいのある人々への偏見に挑戦するリーダーであった加藤孝氏が、施設ではなく地域の中で障がい者が暮らすことができるようにするために熱心に社会の壁を突破すべく活動しており、農業を含



写真1 春の畑



写真2 農園の風景 インゲンの草取り

めて可能性を探っていた。竹内さんは、新しい障がい者福祉の開拓者であったこの実会で障がい者のケアと農業について理解を深める一方、札幌市市民農業講座「さっぽろ農学校」専修コースを終了し、野菜栽培と販売に必要な日本野菜ソムリエ協会のジュニア野菜ソムリエを取得した。加藤さんの勧めもあり、2011年には恵庭市で特別栽培（農林水産省が定めた「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に従って生産された、化学合成農薬および化学肥料の窒素成分を慣行レベルの5割以上削減して生産した農産物）に力を入れている野菜栽培農家と

して実績のある、有限会社余湖農園で道央農業振興公社の研修生として3年間本格的に農業を学んだ。こうした竹内さんの執念による取り組みによりパートナーとなる札幌この実会の同僚であった女性（妻の愛さん）と結ばれることになり、2014年4月に北広島市で2ヘクタールの農地を借りて合同会社竹内農園として新規就農を実現した（写真1・2）。

2 障がい者の受け入れをする農業へ

新規就農者となった竹内さんは、初年度から障がい者福祉事業に取り組む法人と交渉して障がい者の受け入れを業務委託契約として行い、

いわゆる農福連携に着手してきた。この農福連携は、一般的に農業者の人手不足をカバーすることと障がい者にも働く機会を提供できるという趣旨で農業サイドと福祉サイドの連携事業の形をとって取り組まれている。ところで、農福連携の歴史は古く、社会福祉事業を運営している法人が、障がい者の就労の機会を田舎にもつくり出すことを目的として、50年代前から各地で取り組まれてきた。

竹内さんは、農作業体験を障がい者に提供できるようにしていくことで、自分の野菜栽培農家としてのブランドを形成し、同時に障がい者に農作業を通じて生きがいを経験してもらえ、機会を充実させていくことを貫こうとしている。基本理念として、できるだけいろいろな利用者を受け入れることを前提に、彼らに働きやすい環境を整えることを第一にしている。単一品目にしぼって機械化して大規模に経営することは、多様な障がい者の受け入れにつながらないと考えており、画一的な作業を強制する形態はとらない。経営として収益を優先するなら他のスタイルが考えられるが、我々が現地を訪問した際にも、竹内さんは、一人で手作業の仕事をしている障がい者を指して、「実は、一人で自分の

ペースで仕事をしないと働けない人もいるんです」と語る。皆で一氣に作業を終えることで次の仕事に切り替えるのは、効率性を前提にした発想で、大事なことは、人にあった作業を用意していくことであり、農業のように作業を細分化できる職場の強みになると話す。そうすることで、あえて作業する人々の出番をつくり出すようにしている（写真3）。たとえば、収穫した野菜を段ボールに詰めて出荷するのではなく、手間かけて店頭ですぐ並べられるように袋詰めにすることで仕事を増やし、工賃を増やすことにつなげている。当然、販売先の袋詰めの手間を省きたいというニーズに応えることにもなる。仕事をたくさん準備することで、作業に来た障がい者には常に仕事がある状態になるよう



写真3 インゲンの収穫

に努めている。優先度を考えて障がい者が関わることができる作業をしてもらい、それ以外のところを竹内さんと社員で分担している。竹内さんのこだわりは、「作業者がやりやすい農業をやる」「手作業（種まき・定植・支柱さし・草取り・収穫・片付け）が中心」「野菜も作業者が扱いやすいものにする」「機械収穫は今のところ行わない」「草取りよりも収穫作業」「介護を受けている人たちもインゲン・人参・花豆を収穫する」「農家としては多い15種類を栽培する」「仕事がなければ作ってあげる」「スナップエンドウが仕事を生み出す」「仕事の端境期をなくす」「屋内にいる作業者にも仕事を与える」「野菜を袋詰めしてもらおう」「出荷先は地元のスーパーか小売り業者」ということである（写真4・5）。



写真4 人参の収穫作業



写真5 花豆の豆取り

3 エコファーマーと栽培作物

2015年3月にはエコファーマー（「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（持続農業法）」第4条に基づき、「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」を都道府県知事に提出して、当該導入計画が適当である旨の認定を受けた農業者の愛称名）に認定されている。注目されたのは、自身が海外で勤務するなどグローバルな世界に身を置いていた立場から、北海道に目を転じた時にグローバルな



写真6 ネギの定植



写真7 調理トマトの収穫作業

視点で障がい者や高齢者とともに農業に取り組んできた点であったという。

栽培している作物は、葉物野菜では小松菜、水菜、長ネギ、果菜類では調理用トマト、中玉トマト、ナス、ピーマン、ズッキーニ、インゲン、スナップエンドウ等15種類の野菜で、年間200日出荷作業を行っている。3・9ヘクタール・ハウス4棟を代表の竹内夫妻と社員1名、コミュニケーションを取ることが苦手なパート1名のほか、3つの社会福祉施設の利用者等との業務委託で作業している。竹内農園の栽培している主な野菜の面積（R5の計画）は、小松菜30a、サニーレタス・リーフレタス20a、ズッキーニ40a、調理用トマト15a、インゲン20a、花豆

10a、スナップエンドウ15a、ナス7a、人参80a、ネギ15aとなっている（写真6・7）。

2018年8月3日には、北海道150年記念式典への御臨席と併せて地方事情御視察におみえになった上皇上皇后両陛下が竹内農園に立ち寄り、農作物生産状況等について話を聞かれ、障がい者による農作物袋詰め作業をご覧になられている。さらに、2021年には第11回コープさっぽろ農業賞のビジネスモデル部門にて、優秀賞を受賞している。そこでの紹介文にも「2014年に新規就農、農業と福祉の連携



写真8 竹内夫婦

を目的とした竹内農園を設立。障がいの程度に応じた作業の細分化を実現し、損益分岐点も意識しながら経営的な安定を図りつつ、障がい者の雇用拡大につなげています」と、竹内さんが目指す毎年の委託料（事業所に入る収入）の増加と、障がい者の特性に配慮する農福連携のあり方が説明されている（写真8）。

4 農園のコンセプトとこれから

竹内農園の経営方針は、第一に、おいしい野菜を作ること、北海道のきれいな空気、ヤマメが棲むきれいな川に隣接する農園という条件を生かした野菜栽培を行い、特別栽培に準じた

化学肥料・農薬を半分以下に抑えた栽培方法にチャレンジし、野菜の生育ステージにあわせて、温度管理・施肥管理を適切にし、野菜が健全に育つように栽培している。これによりエコファーマーに認定されたのである。土壌改良に関して竹内さんは、緑肥を栽培し、土壌中の窒素を固定し、有機物を増やすこと。15種類の野菜を栽培することで、8科の野菜を栽培することとなり、それを連作障害対策とすること。また、上記の種類の野菜残渣をすきこむことで土壌の物理性を改善し、さらに鶏糞を積極的に利用することで、化学肥料を削減すると共に、土壌中の有機質を増加させることを目指している。

第二に、適材適所を深く考えるということである。農業と福祉の融合を目指して農業経営を開始したことを基礎にして、適材適所を念頭に多様な人たちがそれぞれに合った働き方ができるような環境づくり・仕組みづくりを行う。そのために、15種類ほどの野菜を栽培しており、屋内・屋外両方の仕事を準備している。2016年からは社会福祉法人北ひろしま福祉会の北広島コラボの利用者に農作業を担当してもらい、2020年からは北ひろしま福祉会の就労センタージョブの利用者にも農作業をしてもらっている。

第三に、農業に興味がある人を応援するということに目を向けている。家庭菜園に関する質問から、新しく農業を始めたい、新規就農したいが、どうしたらよいかわからないという人まで多様な動機で課題に直面している人々のサポートをしていく。「自分自身、農業を始めるまでに北海道内各地のいろいろな農家にお世話になってきましたので、今度は恩返しさせてもらう番」と竹内さんは考えている。

実は、竹内農園は、ボールパーク開業で国内外から集客が期待される北広島市にある。今後は人口も増加し、スーパーや飲食店を含め商業施設も増加していくことになる。地域共生社会の建設に必要なのは、多様な個性を尊重する哲学を実践する主体である竹内農園を始めとしたメッセージを発信できる存在である。高齢者・障がい者・児童福祉施設をはじめ、社会福祉学部のある大学が相互に交流する流れも形成されていく。そのようなときに、竹内農園のようなクリアなメッセージを掲げる実践者が大きな役割を果たすことになる。作業の効率化や省力化ではなく、関心のある人々がその可能性にに応じてコミットできるような場所が広がっていくことを期待したい。写真9は食べチョクで知られ



写真9 フルーツソース

る生産者と消費者を結ぶネットワークに出品されることになった食用ほおずきを使ったフルーツソースである。

文

付記 竹内さんには、農場でお話を伺い、その後、科研費(20k22149)でのワークショップのプレゼンテーションを引き受けていただき、このたびZoomによるインタビューにご協力いただいた。細かい仕事の多い野菜栽培において障がいのある方々への仕事を作り出すために作業の細分化(切り出し)を常に考えて取り組まれている。農福哲学の旗手として竹内さんが多くの実践者の学びのモデルとなることが、日本の農福連携の推進につながるものであることを痛感した次第である。写真の提供をいただいたことにも厚くお礼申し上げます。